



大分県選択無形民俗文化財

伊美別宮社流鏑馬



流鏑馬

流鏑馬は、疾走する馬上から矢を射る、日本の伝統的な儀式です。古くから全国の神社で競馬（くらべうま）などとも行われており、古い記録にも武士が武技を鍛錬するために行った大追物（いぬおうもの）や笠懸（かさかけ）といった馬術とは別に、神前などで行われた記録が見られることから、神事として発達したものと考えられています。伊美別宮社では毎年10月15日の秋季大祭の中で、五穀豊穡・家内安全を祈願する神事として行われています。

別宮社の起源は仁和2（886）年とも仁安3（1165）年とも言われ、京都の石清水八幡宮の分霊を勧請（かんじよう）…祭神を分けて祀ること）したものとされていますが、流鏑馬をいつから始めたかは記録がなく分かっていません。宝永2（1705）年の記録にみられるので、その頃には恒例行事になっていたと考えられます。

かつては各地の神社で流鏑馬が行われていたと考えられますが、現在大分県内ではこの伊美別宮社でしか行われていません。昭和56年に大分県の選択無形民俗文化財に選択されています。

別宮社流鏑馬

別宮社の流鏑馬は、氏子の7地区が1年交代で当場区（とうばく）…祭典を担当する地区）を務め、神事奉行（祭典の統括役）と当場区長を中心に執り行われます。流鏑馬の主役である射手（いて）も当場区から選出されます。

流鏑馬の準備は、現在簡素化された部分もありますが、昔からのしきたりに沿って進められます。まず9月1日に射手奉告祭を行い、射手が正式に決定します。10月9日に流鏑馬の会場となる馬場を清掃し、12日に神前に供える矢と流鏑馬に使う矢を作る、矢別祭（やはぎまつり）を行います。13日は当場区で当場宵宮祭（よいみやまつり）を行います。当場宵宮祭では牛が練り歩く練祭（ネンガク）が行われます。以前は本物の牛でしたが、現在は張り子の牛を使います。牛が登場するのは石清水八幡宮から勧請した際に神職が牛に乗って神体を祀ったという由来によるものです。練祭の後に別宮社里楽師による神楽（県指定無形民俗文化財）が奉納されます。大祭前日の14日は出御祭（宮上せ）で、神職・里楽師・射手・馬・舎人・当場区の諸役が行列を整え、当場元から別宮社へ上ります。別宮社では宵宮祭が行われ、当場宵宮祭と同じく練祭や神楽が奉納されます。

大祭当日の15日は、早朝に「寄進の的」と呼ばれる流鏑馬神事が奉納されます。そして午後1時過ぎから大祭の神事が行われ、午後4時から流鏑馬が奉納・披露されます。

祭神に奉納する流鏑馬

「寄進の的」（午前6時ごろ）

射手は袴を着用して舎人にとともに

われ、騎乗して馬場に入場します。楼門の前には神職・神事奉行・鏑矢家元・当場区長などの諸役が並びます。



神事奉行から神酒の杯を受けて飲み干すと、本殿に向かい二礼二拍手二礼の拝礼をし、馬場を素走りします。

素走りから戻るとまた神酒を飲み拝礼して、弓と鏑矢が渡されます。射手は馬を走らせ、一番手前の的から順に3本の的を矢継ぎばやに射ます。そして楼門前に戻り、再び杯を受け、拝礼して、馬場を素走りします。ただし、現在足速の競走馬が使われるため、3本の的を矢継ぎばやに射ること



は難しく、1走目で1番目の的、2走目で2番目の的という風に3回に分けて射ています。馬場を1回走ることを一馬場（ひとばば）といい、流鏑馬では奇数回走ることになっているため、素走りの回数で調整します。



この時射られた鏑矢には無病息災の御利益があるといわれ、早朝にもかかわらず矢を拾いに来る人もいます。

射手と舎人

射手（いて）



射手に選ばれることは大変な名誉とされてきました。以前は9月1日に別宮社の神前で釣りくじにより、数名の候補から射手1名・補欠1名を決めていました。近年は事前に射手1名を決めておき、奉告祭で神前に奉告する形になっています。また10月9日から13日の間は自宅に籠もり、精進潔斎（しょうじんけつさい）…酒や肉食などをつしめ、心身を清める）の生活をしながら流鏑馬に備えるしきたりがありました。

14日の出御祭で流鏑馬の装束である鍔直垂（よろいひたれ）を着用し、馬に乗って別宮社へ上ります。そして宵宮祭の間、境内の一角に設けられた籠り屋に籠り、三宝に洪柿を盛つてじつと見つめます。

大祭当日は、袴（かみしも）姿で寄進の的と大祭ののぞみます。神事終了後、直垂に着替えて流鏑馬に備えます。流鏑馬を終えると拝殿に参拝し役目を終えます。

舎人（とねり）

舎人は流鏑馬の期間中、常に射手に付添い、馬の世話や乗馬訓練をします。現在では馬を飼う家がないため、競馬場や乗馬クラブから借りてきますが、以前は地元の農耕馬を借りて射手宅に仮馬屋を作って舎人と射手が世話をしていました。また射手が籠る間の

食事の世話なども舎人が行っていました。

流鏑馬の矢

別宮社流鏑馬では、寄進の的には鉄の矢じりをつけた鏑矢（かぶらや）を、午後からの流鏑馬には矢柄竹の矢を用います。

また流鏑馬に使う矢は、鏑矢家元かぶらやいもとの行平家が作ることに決められています。

鏑矢家元は流鏑馬の時には袴を着用し、赤い鉢巻を締め、射手が馬場に入場する際に弓と矢を掲げて射手の前を歩きます。

鏑矢（かぶらや）

鏑矢とは、矢の先端に鏑（かぶら）と呼ばれる紡錘形の器具を取り付けた矢のことです。その先に二股に分かれた雁（かりまた）と呼ばれる鉄製の矢じりをつけます。鏑は6つの面があり、それぞれ奉納祭典月日・当場区名・神事奉行名・当場区長名・射手名が記されます。

なお、鏑に数箇所穴を開けたものを曇目鏑（ひきめかぶら）といい、射放つと笛のように高く鋭い音を発するため、邪を払い場を清める力があるとされます。古来戦場での合図に用いられた。ただし別宮社の鏑矢は音を発するようには作られていません。

別宮社流鏑馬では6本作られ、そのうち3本が寄進の的に射られます。そして残り3本は午後の大祭で神前に奉納されます。



参拝者に披露する流鏑馬（午後4時）

馬屋から馬が引き出され、鍔直垂を着用した射手が騎乗します。鏑持ちを先頭に、紋付袴姿の鏑矢家元が弓と矢を掲げて続き、舎人が馬を引きながら、馬場に登場します。



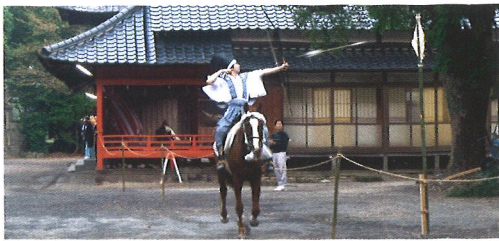
楼門の正面にある桜の木の周りを左回りに3周し、楼門前に並ぶ諸役や巫女と対面します。射手は頭のかぶり物を鳥兜（とりかぶと）から菱烏帽子（もみえぼし）に替えます。後は寄進の的と同じく、騎乗したまま杯を飲み干し、拝礼して馬場を素走りします。その後3本の的に向け竹矢を連続して射て、それを2回、計6本の矢を射ます。

これも競走馬になってからは、1走目に1番目と3番目の的、2走目に2番目の的を射て、これを2回繰り返して、計4回走って6本の矢を射るようになっています。的射に続いて、紙吹雪を撒いたり扇で砂をすくう所作などを披露しながら走ります。最後にまた素走りすると、今度は逆方向から走る逆馬場（さかばば）をして流鏑馬が終わります。これも逆馬場まで含め奇数回行われ、素走りなどの数で調整します。古い記録では12回半（半は逆馬場なので、これを入れると13回）走っていたこともあったようです。



伊美別宮社秋季大祭(流鏑馬神事) 10月15日

午前6時ごろ～ 寄進的(別宮社馬場)



祭神に奉納する流鏑馬。
3本の的に向け、3本の鏑矢を射る。この鏑矢を持ち帰るとご利益があるといわれ、早朝にもかかわらず矢を拾いに来る人も。

午後～



子どもたちの曳山が大祭を盛り上げる。

午後1時30分～ 大祭(別宮社本殿)



本殿横での修祓(しゅばつ:神前に上がる前に行う清めの儀式)



拝殿へ参列して神事



玉串を奉納する射手

午後2時30分～ 神幸祭(本殿～浜殿)



浜殿へ向かう神幸行列



浜殿で神楽、巫女舞が奉納される



午後4時～ 流鏑馬(別宮社馬場)



本殿に向かい拝礼する射手



的射のほかに紙吹雪なども披露される



終了後は参拝者に餅まきが行われる

案内図



お問い合わせ

国東市伝統文化活性化実行委員会

事務局：国東市教育委員会 文化財課

〒873-0504 大分県国東市国東町安国寺 1639-2

国東市歴史体験学習館内

TEL：0978-72-2677

FAX：0978-72-2505

祭りの参拝についての注意

祭りには、学術的な調査や記録以外、一般には公開されていない部分もあります。個人宅や屋内等で行われる非公開の行事には、関係者のみで行われる神聖な神事や住民のプライバシーに関する事柄も含まれています。祭りの伝統やしきたりを尊重し、迷惑をかけることのないようにしましょう。また、神社境内での公開行事では、マナーを守って写真撮影等を行い、祭りの関係者や参拝者に迷惑をかけることのないようにしましょう。